

丹沢大山学術調査経過概要

昭和37年6月1日、財団法人国立公園協会は神奈川県に依頼にもとづいて首題学術調査を行なうことになった。本書はその調査報告書であるが、第1部より順を追って、以下に調査経過の概要をのべる。

第1部 丹沢山塊の地質

(1) 執筆者の担当事項

位置・交通	坂本 峻雄
地形・地質の概要	坂本 峻雄
丹沢山塊の生いたち	
全 般	松田 時彦
丹沢東部および北部	見上 敬三
丹沢中部および南部	松田 時彦・大木 靖衛
丹沢山の地学案内	
全 般	見上 敬三
温 泉	大木 靖衛

(2) 現地調査期間

昭和37年7月より昭和38年7月

第2部 丹沢山塊の植生

(1) 担当者：宮脇昭，大場達之，村瀬信義

(2) 植生調査，相観を主とした植生（地）図および植物社会学的群落単位の決定，それによる植生図作製の3つの調査が平行してすすめられた。

第3部 丹沢山塊の植物相と植物群落

(1) 項目と執筆責任者

1. 丹沢の植生概観	沼田 真
2. 木本性群落の生産構造	生嶋 功
3. 木本性群落の分産構造と遷移	
ブナ林の分散構造，二次林	延原 肇
モミ林の分散構造	手塚 映男
4. 草本性群落の構造と遷移	沼田 真
草原の生産構造	手塚 映男
5. 人里植物の分布からみた丹沢地域の原始性	小滝 一男・岩瀬 徹
6. ブナ帯植物の生活型	浅野 貞夫
7. シダ類の分布と生態	西田 誠
8. 蘚苔類の分布と生態	浅野 貞夫・手塚 映男
9. 丹沢の植物景観	石井 弘

(2) 経過と目標

昭和37年、国立公園協会の神奈川県に依頼によって調査団の植物班としてわれわれ（沼田他）がこの仕事を引き受け、じっさいに軌道にのったのは7月のことであった。これより先、厚生省の自然公園審議会では、国定公園候補地として丹沢をとりあげており、やがて確定される段階にあるのであるが、公園地域の調査報告書がないので、急ぎよ作成しようというわけである。しかし如何せん当初年度内に出版という目標で時間が少ないので、われわれ植物班では、植生図を作成する宮脇博士のパーティーをべつとして、目標べつに上の(1)項のような9パーティーを編成し、早速7月か

ら現地調査にとりかかった。

各パーティーとも責任者の他に数名の協力者をえらび、平均して2回、正味10日以上現地調査を行なっているので、延人員でいうと480名ほどの人力で、かなり短い期間内にこのような調査を行なったわけである。理想からすれば、もっと少数の人員でも何年かにわたった継続調査がのぞましいのであるが、地元の要望はそのように長期にわたることを許さないし、一方、沼田は昭和38年3月から東部ネパールの学術調査に出かけねばならないなどの事情もあって、当初の予定どおり年度内に報告書をまとめることとした。

本地域のわれわれの研究調査に密接な関係のあるものとしては、多年の研究になる林彌栄博士らの「丹沢山塊の植物調査報告」(1961)があり、とくにそこに集録された「丹沢山塊高等植物目録」はじつに貴重な成果で、われわれの調査においても有力な指針となった。

われわれの植物班は調査計画の立案にあたり、いままでの丹沢地域の調査報告に注意したが、われわれの目標とする生態学的調査の点から、とくに全地域にわたるものとして参考としたのは、古くは武田久吉博士、最近のものでは林博士らの報告であるが、それらを勘案した上で上記(1)項のような調査項目をとりあげたのである。そして7月と11月と2回全体会議を開き、次のような方針のもとに報告書をまとめた。

内容：各題目についての論文の形式をとるが、一般の人にもわかるように解説的部分を十分考慮し、かつ自然公園との関連を念頭におくこと。

記述形式：1. 横書き、である体、新仮名づかい、写真は本文中は手札型、説明をつける。

2. 図、表は図1, 2, ……表1, 2, ……として、それぞれ説明、標題をつける。

3. 謝辞は各班の作業に直接関係のあった方について各章の緒言の中へのべ、全般的謝辞は総論(沼田)の章でふれる。

4. 脚註は*, **, ……で示す。

5. 調査地点とコースは、各章ごとに、配布する地図上に範例にしたがって記す。

6. 引用文訳は本文中該当箇所の肩に1), 2), ……として示し、文献は各章の末尾に一括して、
1) 著者名：標題 雑誌名 巻(号), 頁一頁(年)の形で示す。

7. プレート原稿はB5版の大きさ(両面プレート)にそのまま入るように写真の配列や説明を考えてつくること。(沼田 記)

第4部 丹沢山塊の動物

(1) 調査項目と研究分担者

調 査 項 目			研 究 分 担 者
陸地の生態系と動物群集			北沢右三, 斎藤 晋, 中村方子
シカの生態と植生との関係			柴田敏隆, 村瀬信義
溪 流 動 物			斎藤 晋, 関根和伯, 土屋清喜, 北沢右三
動 物	せ ぎ 椎 動 物	哺 乳 類	柴田敏隆, 今泉吉典, 吉行瑞子, 小原 巖
		鳥 類	柴田敏隆
		爬 虫 類	柴田敏隆, 松井孝爾
		両 生 類	柴田敏隆, 松井孝爾
		魚 類	関根和伯

相 と 動 物 地 理	昆 虫 類	ア	リ	類	近藤正樹		
		翰	翅	類	中村 光		
		鱗	翅	類	木暮 翠		
		毛	翅	類	齋藤 晋, 土屋清喜, 津田松苗		
		半	翅	類	中村 光, 石原 保		
		カ	ゲ	ロ	ウ	類	齋藤 晋, 土屋清喜, 津田松苗
		積	翅	類	齋藤 晋, 土屋清喜, 津田松苗		
		粘	管	類	今立源太良		
	唇	足	類	篠原圭三郎			
	倍	足	類	篠原圭三郎			
	ク	モ	類	八木沼健夫, 近藤昭夫			
	ダ	ニ	類	青木淳一			
	陸	産	貝	類	小菅貞男, 関口秀一		
	貧	毛	類	安立綱光, 大野正男			

(2) 調査の経過概要

1. 現地調査：合同調査および個別調査によってなされた。生態学的研究はその総合性のためほとんど全部が合同調査によっておこなわれている。動物相の調査は調査対象とされる動物群の生活習性や採集法に大きなちがいがあるため主として個別調査によってなされた。合同調査の期日、調査項目、経路、人員を表示すればつぎのようである。個別調査は数多くなされたが、ここにあげるとは省略する。

期 日	調 査 項 目	経 路	人 員
1962年 7月3～5日	植物、動物、地学の合同調査	ユースン—簗沢—石棚山—檜洞丸—蛭ガ岳—札掛	動物班からは北沢右三・柴田敏隆の2名が参加
7月20～25日	陸生動物のファウナと生態の合同調査	札掛—堂平—塔ガ岳—丹沢山—蛭ガ岳—長者小舎	北沢右三, 柴田敏隆, 齋藤晋, 青木淳一, 小暮翠, 中村光
8月4～6日	裏丹沢の生態系と溪流の子備調査	長者小舎—犬越路—大室山—簗沢—中川川	北沢右三ほか1名
8月13～20日	溪流の動物相と溪流動物群集	1. 大日沢—塩水—中津川—宮ガ瀬—落合 2. 白石沢—簗沢—落合—神繩	北沢右三, 齋藤晋, 関根和伯, 土屋清喜, 中沢幹夫, 宮原義夫
8月23～27日	動物群集と生態系	ユースン—熊木沢—姫次—蛭ガ岳—檜洞丸	北沢右三, 齋藤晋, 中村方子
10月31～ 11月4日	動物群集と生態系	ユースン—熊木沢—蛭ガ岳—大倉屋根	北沢右三, 齋藤 晋
1963年 5月6～9日	動物群集と生態系	青根—姫次—蛭ガ岳—姫次	北沢右三ほか1名

2. 実験室内の研究：生態学的な室内作業は都立大学理学部生態学研究室で行なわれ、溪流動物の処理は主として群馬大学生物学研究室で行なわれた。(北沢 記)

第5部 文化景観

神奈川県観光協会は、丹沢大山地域全域にわたって、社寺、史跡、聚落、風俗などを調査、資料を収集して、文化景観および文化財・天然記念物につき報告書を完成した。

第6部 調書および図面

神奈川県土木部計画課は、調査団に種々の資料・情報を提供するかたわら、権利制限関係、産業関係、利用関係、その他調書および図面を完成した。

謝辞 調査にあたり、つぎの方々には特にいろいろお世話をいただいた。貴重な文献を提供して下さった方々、直接に作業をお手伝い下さった方々もいる。また、大変むずかしい種の同定を心よく御承諾下さった同学の士、あるいは、現地での調査にあたり、一方ならぬ便宜をはかって下さった地元の協力者の方々もいる。調査の全期間をつうじ、いろいろな方々の温かい御協力に対して、ここにそのお名前を記して厚くお礼を申し上げる。

鈴木照始・小粥康治・宮地俊作・佐藤文信・近藤充恵・福島雅子・浜田丈夫・中村芳男・塔ガ岳県有林ヒュッテの方々・北川政夫・安藤久次・林 彌栄・武田久吉・林 一六・大賀宣彦・蒲谷 肇・金子芳蔵・鶴岡 繁・室井 緯・中川昭義・津田松苗・中村守純・赤羽紀年・高山一彦・村山健治・久留島昭彦・村上陽三・杉 繁郎・中村正直・石原 保・G.G.E.Scudder・E.Kjellander・阿村良介・大山 桂・桜井欽一・岡本正豊・波部忠重・大淵真竜 (順不同、敬称略)